IRON CLUB
アイアンクラブ
第193号
令和5年7月

神戸三社参り＋１

湊川神社（なんこうさん）

生田神社（いくたさん）

長田神社（ながたさん）

弓弦羽神社

退職後生まれ故郷の神戸に戻った。近所を散歩すると方々に神社があるので調べてみたら兵庫県は全国で2番目に神社が多い。因みに1番多いのは新潟県。理由は良くわからないが、明治21年の人口調査では新潟が1位で兵庫が2位ということなので、それも一因かもしれない。

という事で、初詣の定番と言われる神戸三社を巡ってみた。生田神社（いくたさん）、湊川神社（なんこうさん）、長田神社（ながたさん）。生田神社のご祭神は天照大神の妹神の稚日女尊（わかひるめのみこと）で西暦201年に祀られ、799年に今の地に遷ったと伝えられる。長田神社も同じ201年ご鎮座の由緒ある神社。湊川神社は毛色が違い、武将楠木正成を祀る明治5年に創建された日本初の別格官幣社。ご利益も生田さんが「縁結び」、長田さんが「商売繁盛」、楠公さんが「魔除け開運」とそれぞれ。

プラス１はウオーキングで日々立ち寄る弓弦羽神社。名前が似ていることで羽生結弦選手が何度も参拝した事で有名になった。

どの神社にも鎮守の森があり清浄な空気が感じられる。

（写真・文　松浦康夫）

会報１９３号（令和５年7月）目次

第56回定時総会（7月11日）・第135回理事会（6月5日）の報告			1
ずいそう「パイプラインを追いかけた半世紀」	倉上 雅彦		2
ずいそう「鹿島アントラーズ誕生のこと」	髙橋 健二		8
Monday Forumを語る	山内 卓		11
（シリーズ）賛助会員企業の横顔 五十鈴株式会社 エムエム建材株式会社			13
（名所旧跡散策）「春の名所・旧跡散策バス旅行の記」	色川 史郎		15
（地域の会）「千葉の会：市川真間の歴史と里見公園の探訪」	矢島 勉		17
「国府台探訪記」	田中 秀一		19
（第４9回）音楽鑑賞会「第134回定期演奏会」	保倉 裕		22
ウィーン少年合唱団公演　鑑賞記	保倉 裕		24
（第79回）囲碁大会	木村 正文	金田 守司	26
（第140回）麻雀大会	大西 建男	平山 喜三	28
（第115回）ゴルフ大会（金乃台カントリークラブ）	林 岳志	渡辺 徹	29
お知らせ			31
新入会員・新委員長・新委員の紹介、訃報			32
今後のスケジュール			33

第56回 定時総会

7月11日、鉄鋼会館会議室にて、第56回定時総会が開催されました。
当日の出席者は35名、委任状382名、計417名の賛否で、以下の議題が原案通り承認されました。
また、総会終了時に、正副理事長から挨拶がございました。

（議案）第一号議案（報告事項）　2022年度事業報告の件
第二号議案（報告事項）　2022年収支決算報告の件
第三号議案（審議事項）　2023年事業計画案の件
第四号議案（審議事項）　2023年収支予算案の件

第135回 理事会

総会に先立ち、6月５日、鉄鋼会館会議室並びにオンライン会議により第135回理事会が開催されました。当日の出席者は会場参加16名、オンライン参加14名、委任状42名で、以下の議題が原案通り承認されました。
議事終了後、正副理事長と各理事との意見交換が行われました。

（議案）第一、「委員会活動報告」の件
（１）総務委員会報告
①2022年度「個人会員」総員・入会・退会状況の報告
②「賛助会員会社」の状況
（２）各事業委員会所管事業報告
第二、第56回定時総会付議事項の件

パイプラインを追いかけた半世紀

倉上　雅彦（元丸紅及び日鐵商事）

随想なので、時系列にはこだわらず、思い浮かんだ事、特にエネルギーやパイプラインに焦点を絞り、約半世紀の会社員生活で体験した事をエピソード的に書いてみようと思う。昔から大変お世話になっている羽矢さん（アイアンクラブの総務委員長）より、アイアンクラブ会報に随想を書いてくれないかとの依頼があり、文章を書くなどから遠ざかる生活も長く、いかなる随想になるか心配しながらまとめてみました。

昭和43(1968)年4月に「丸紅」に入社し、鉄鋼輸出部鋼管課に配属されました。何も分からず、やる気だけは満々の20歳そこそこの若造でしたが、与えられた仕事は契約の船積業務のみ。課長に直訴し、早く営業活動をやらせて欲しいなどと言ったのを覚えています。

その後、中東・アフリカ・欧州方面へのラインパイプの販売グループに所属しましたが、そこでも魅力的な業務が与えられる訳でもなく、船積業務と先輩の書いたTelex原稿を清書する毎日でした。半年程で上司、先輩に連れられ、メーカー回りなるものにお供し、必死で名刺配りをしつつ、話に耳を傾ける毎日でした。

昭和46年（1971）5月、日本鋼管（現JFE）が中東/アフリカ/欧州にラインパイプ用鋼管の技術ミッションを派遣すると言う話が持ち上がり、そのミッションの一員として海外出張を命じられました。ろくに英語の読み書きも英会話も出来ない新米社員を、よく出張させたものだと思う反面、一員として受け入れてくれた日本鋼管には感謝しておりますが、海外旅行は勿論、パスポートも外貨を持つのも初めての経験でした。

団長の高瀬次長は、日本鋼管ロス事務所長から帰国したばかり。随行の青山係長もロス駐在帰り、エンジニアの小田島課長は何度も海外出張経験済みという方々でした。旅程はまずイランから、イラク、シリア、湾岸諸国、次にエジプト、リビアを巡り、ロンドン経由の帰国でした。

最初のイランに入国の際に青山さんより、入国カードにSexとあるけど経験したかどうかを書かなければならない等と、おちょくられながら、楽しい出張をこなしたことを今でも懐かしく思い出します。

駐在員がホテルの予約や空港への出迎えに、通常来てくれますが、鉄鋼の駐在員がいない処もあったり、通信事情で連絡が行き届かず出迎えの確認がなかったりという事もありました。

リビアのトリポリがその例で、ホテルの予約と出迎えの確認が取れぬままにカイロを出発し、トリポリに着いたが、出迎えはありませんでした。たどたどしい英語で、トリポリで一番良いホテルの名前を聞き、タクシーに其処へ行くように指示し、ホテルに着き、堂々と予約があると言ったら、Yesと言って部屋に通してくれました。しかし、駐在員がこのホテルを予約したのか、フロントが気おされして、部屋が空いていたので案内したのか、咄嗟には判断がつきませんでした。結果的には、予約されていた事が確認出来ましたが、もし飛行場で別のホテルを案内され、そちらへ行っていたら、携帯電話もない当時にどうなっていたか今でも思い出すとぞっとします。

商社マンが出迎え、ホテル予約、客先やレストランへの案内など（所謂、客先アテンド）をやって

おりますが、それが如何に大切な業務・役割かがよく理解出来、その後の商社マン生活での信条になりました。

昨年ワールドカップで沸いたカタールのドーハにも行きました。ミッションが三菱商事さんのアテンドで、クウェートに行かれている間に、ベイルートの鉄鋼担当の駐在員（当時はベイルートが中東・アフリカ地域の中心的な場所で、各部からの駐在員が居た）が、カタールと隣国のアブダビの客先に連れて行ってくれましたが、直ぐにベイルートに戻らなければならず、カタールでは現地代理店頼みで、ひとりで2日間過ごしたのを覚えています。現在のドーハとは似ても似つかぬ土漠の町で、外国人が泊まれるホテルはオアシスホテルのみ。現地代理店は気を利かせたのか、夕食を食べようと自宅に招待してくれました。通称オバQと言われる白い服を着た5~6人のカタール人（男性）が代理店宅に集まり、食事（羊の肉入りチャーハン）の準備をし、ふるまってくれました。

皆さん手で食べるので私も真似してみましたが、物凄い羊のにおいに閉口。そこでチャーハンの代わりに、食卓に美味しそうなオレンジが置いてあるので食べて、美味しいと言ったら、同席していたカタール人が一斉にオレンジに手を出し剥き始め、剥き終わると全員がこちらに差し出します。羊の脂がギトギトしているオレンジは、美味しいと言ったもののそう食べられるものではありません。

後で判った事はアラブ人に褒めるという事は欲しいという事なのだと教えられ、納得した次第です。奥さんや娘さんは絶対に姿を現しませんが、きれいだなど誉め言葉を言うと、欲しいという事になるようです。そんな珍道中をやりながらの最初の海外出張でした。

カタール・ドーハの街の子供たち

昭和46年（1971）8月15日のニクソンショックで始まった激動の1970年代ですが、オイルショックを契機に中東地域がますます注目され、世界の表舞台に登場しました。パイプラインが中東各国で計画され、日欧のパイプメーカー（及び商社）が受注争奪戦を激しく繰り広げる事になりました。特に印象深いのは昭和45年（1970）に計画が発表され商談が開始されたイラク戦略パイプラインです。

日本鋼管（丸紅）、新日鐵（日商岩井）、住友金属（住友商事）での共同商談で、川崎製鉄はUOE鋼管製造設備の建設中で、商談に入っていませんでしたが、対応が可能になれば参加するという約束が出来ており、日本はメーカー・商社連合での対応でした。

詳しい商談経緯は昭和61年に産業新聞社から発刊された、「日本鉄鋼輸出外史の下巻」に上司の絹巻さんが詳しく書いておられるので重複は避けますが、昭和48年（1973）春に商談が開始され、数回の出張を繰り返しても決着がつかず、秋を迎えました。

イラク石油省傘下のSCOP（State Company for Oil Projects）のプロジェクトチーム7名が交渉相手で、商談は一向に進まず、日本を長期に空ける訳にはいかないので、現地部隊は住商の荒井課長を団長に日商岩井の坂部さんと倉上が残り、主要メンバーは日本に帰国しました。連日、SCOPより呼び出しはあるが、商談は進展せず、バグダッドホテルの中庭でチグリス川の流れを見ながら、どうなる事かと荒井課長とビールを飲みながら話をする毎日でした。

日本側からそういつまでもofferを延長出来ないと最後通告を出し、それを先方に伝え、数日の睨み合いになりました。その時は何も分りませんでしたが、膠着状態が続いていたまさにその時、昭和48

年（1973）10月6日に第四次中東戦争が勃発していたのです。

いつもは朝の９時に迎えに来るSCOPの車が来ず、通りの車が異常に少なくおかしいと感じましたが、社有車（外出可能）を持っていた住商の駐在員がホテルに来て中東戦争がはじまり、外出禁止令が出されたと伝えてくれ事情が判ったものです。

翌日夕刻、SCOPより呼び出しがあり、総裁室で劇的な20万トンの発注内示がありましたが、それからが小生には大変でした。既にofferの有効期限が切れている可能性もあり、一刻も早く東京に発注内示の連絡を入れなければならぬが、中東戦争勃発の関係で、電話もTelexも一切駄目。隣国のクウェートからなら連絡出来るかもしれぬと、小生が連絡員となりバグダッド駅から夜汽車でバスラに向かいました。

ウィスキーのポケット瓶をバグダッド事務所が差し入れてくれ、列車はバグダッド駅を出発、約600キロ離れたバスラ駅に。車窓はひたすら砂漠だが、ここに我々が納入するパイプを使ったパイプラインが出来るのだと思うと感慨が胸にこみ上げたのを覚えています。

朝、バスラに着きましたが、クウェートとの国境を通過せねばならず、その入国ゲートは2キロ程先で、バスとタクシーは大勢の人だかり。少し外れた処に停まっていたタクシーに金はいくらでも出すので、クウェートのヒルトンホテル迄行ってくれと頼み了解を得て乗り込もうとすると、タクシー待ちをしている人達が、一人で一台の車を使うとは何だ。俺たちも乗せろと言い出し、これでは東京への連絡がドンドン遅れるので、運転手に金を掴ませ、発車させました。

知っていると言うので、頼んだ運転手だが、ヒルトンホテルの所在地を知らず、宝石店（英語が話せ、沢山ある）で何回か場所を聞いたりしながら、やっとクウェート・ヒルトンに着き、国際電話で上司に受注報告をした次第。

イラク・バスラ港での戦略パイプライン用パイプの搬入状況

イラクはこの商談以降も次々に大型パイプラインプロジェクトを発表し、数年の間に数件の案件で同じSCOPから総量約２０万トンを共同商談で受注しました。2回目商談からは川鉄（伊藤忠）のUOE鋼管工場も稼働し、共同商談に参加しました。イラクのみならず隣のイラン、湾岸地域やサウディアラビアでもパイプラインは続々と計画され、その多くのラインパイプが日本のパイプメーカーより納入されました。

「日本鉄鋼輸出外史」に住商の宮原さんが書いておられますが、住商/丸紅で進めたイランでのパイプの敷設現場渡しの契約も記憶に残ります。雨で既存の橋が流され、我々が自費で修理を行い期日までに完納し、客先からは大きな評価を受けました。

イラク・イランやカタール・アブダビ・サウディアラビア等を中心に、パイプライン案件を追いかけていましたが、昭和54年（1979）にロンドン支店への転勤命令を拝承し、ロンドンから中近東・アフリカ・欧州などのパイプライン案件をフォローするようになりました。

中東にもまだまだパイプラインプロジェクトが沢山計画され、実現しておりましたが、ロンドン駐在時代は北海の油田、ガス田の開発が大きく進展し、欧州パイプメーカーの膝元に日本製のパイプが北海のパイプライン用鋼管として納入される事になったのは印象的でした。確か、技術的な優位性によるものと理解しております。

昭和59年（1984）にラインパイプ課長を拝命し帰国したが、昭和64年（1989）に再度ロンドン支店勤務を命じられ赴任、平成3年（1991）に帰国しました。

平成3年（1991）11月、縁あって日鐵商事に転社し、産業機械部に配属されました。日鐵商事には新日鐵の鋼管輸出部時代に大変お世話になった、落合さん（専務）及び筒井さん（常務）がおられ、仕事がやり易い環境だったのを覚えております。

日鐵商事では、落合さん・筒井さんが中心に立ち上げたベトナム事務所とモスクワ事務所を出来るだけ早く軌道にのせ、実体のあるものにする事を期待されました。但し、丸紅時代にはロシアやベトナムは担当しておらず、市場・客先の情報もほぼ皆無の状態からの出発で、与えられたスタッフもロシアやベトナムの市場経験者はおらずどうするか悩む反面、遣り甲斐も感じました。

まずビジネスのネタ探しの為、平成4年（1992）のゴールデンウィークの頃にエネルギー産業の中心であるヒューストンに出張し、パイプラインの施設業者を中心に面談し、ビジネスチャンスを窺いました。面談した業者の1社（油田掘削業者）より、ベネズエラのマラカイボ湖での石油採掘事業に必要な掘削船を自分で持ち込む条件で受注した。掘削船を発注せねばならぬが、資金の目途が立たぬので面倒を見て貰えないか。もしファイナンスの面倒を見て貰えるなら商談の主契約者として、日鐵商事を指名するという条件でした。

直感で面白いと思ったのですが、日鐵商事の役員会の許可が取れるかどうか、ファイナンスも可能かどうか等判断がつかず、丸紅の先輩/同僚のいた丸紅ヒューストン支店に飛び込み、案件を説明し、共同商談案件で取り組まないかと提案して了承を得ました。役員会に稟議を上げ、リスク分析や諸々調査は丸紅と共同で行っており、丸紅は大変乗り気だと説明/説得をして何とか稟議を通し、契約に持ち込みました。リスクを軽減する為に、米国の輸出金融保険制度を利用する交渉や契約書の作成には法務・金融のエキスパートが必要になり、オーストラリア人の弁護士と公認会計士を雇用し本件に対応した。回収は期日通りに行われたが、その後、ベネズエラは大きな政変を迎え、現在、掘削船が稼働しているかどうかもわかりませんが、ベネズエラ国及び国民に貢献しておれば良いがと思っております。

この商談がひとつの契機及びヒントとなり、エネルギー業界での新たなビジネスの可能性を感じ、ロシア市場調査の為に出張しました。ロシア語は全く判らず、話せず、客先情報も殆ど無い状態で、古巣の丸紅モスクワ支店及びコマツモスクワ事務所に大変お世話になりました。

ロシアはゴルバチョフ体制からエリツィン体制への変換の時期で、それまでに確立された輸銀のバンクローンによるファイナンス等諸々の旧体制は崩壊し、エリツィンの下で新体制が築かれつつありました。ロシアの石油・ガス産業は石油・ガス産業省と言う国家支配から各地の石油・ガス生産組織が続々独立しつつあり、同時に、外国貿易省傘下の買い付け公団が権限を失っていく時期でした。既存の対ロ・バンクローンやサプライヤーズクレジットに対する返済の対応機関も定かではなく、決済も滞り、大手商社は対ロ債権を不良債権と見なし、新規商談などもってのほかと言う状況であったと記憶しております。ロシアの石油産業とガス産業は少し改革の方法が異なり、石油産業は地域毎（例えばウラル、西シベリア等）の石油生産企業が独立すると同時に民営化され、パイプライン計画（幹線パイプラインはトランスネフテの独占状態は続く）や石油の販売及び必要機材の買い付けなども独自で出来る仕組みになって来ました。

過去にロシア市場で実績がない日鐵商事にはこの状況は追い風でした。早速、地域毎に独立しつつある石油会社を訪問し、購買計画や方針を聞いてみると、大きな計画を持っている（従来のプロミシ

リオやマシノインポート時代では知りえなかった内部情報）のが判り、どうしたらここでビジネスを作り上げることが出来るか思考したのを覚えております。

ロシア経済を立て直し自由陣営に近づける為にも、ロシアのエネルギー産業の立て直しは急務であると言う国際的な機運の高まりが見られ、世銀はエネルギー産業復興特別ローンを発表しました。世銀ローンは数十億ドルで対象はロシアの石油産業（具体的には独立・民営化された石油各社）で、対象の石油会社が入札を発表し、契約を決め、発注者への支払いは世銀開設のＬ／Ｃで決済される仕組みでした。

英文の入札書類を読み熟し、適切なサプライヤー（日本製品である必要は無い）を探し出し、応札書類を作る事は経験のある日本の商社マンでもかなり骨の折れるワークだと思いますが、日鐵商事でそれをやるにはどうしたら良いか考えた結果、ベネズエラ案件で契約した弁護士/会計士を継続して雇用。それ以外に米国/シンガポールから5人程の若手外人社員を採用し、7人の外国人と5人ほどの日本人の混成部隊で世銀ローン案件に対応し、相当量の案件を受注し、ロシア市場での大きな足掛かりを形成する事が出来ました。

日鐵商事 産業機械部の日本人・外人混成部隊

世銀ローンプロジェクトの最後の大型案件は北極圏のコミオイルが実施した石油・ガス・水分離プラントです。当社以外に応札者がおらず、受注。北極圏のハリヤガ市に石油・ガス・水分離プラントを完工させ、プラントの操業指導まで行うという入札条件に応札するところはどこも無かった為、無競争当選になったと思われます。

当社は主契約者として、ハリヤガ市に隣接する極地のウシンスク市にプロジェクト施工事務所を設営し、案件実施を行ったが、多くのエンジニアリング業務が絡む案件なので商社では手に負えない処が多々あり、ロシアの石油・ガスプラントに多くの実績を有するTEC（東洋エンジニアリング）を下請けとし、本件の完工・納入及び客先への操業指導を行い、世銀からの代金回収も遅滞なく出来ました。この分離プラントは現在も未だ極地で稼働しているはずです。

コミオイルへ納入した石油・ガス・水分離プラント

世銀の動きに呼応して日本政府もロシアエネルギー産業支援のため、ファイナンスを出すことを決めていましたが、滞り債権の解消と新規ファイナンスの提供を満足させる仕組みがなかなか難しかったと記憶します。筒井常務とコマツの安崎専務（当時）で話し合いが持たれ、鋼管と建機のパッケージでビジネスを進めようと言う事になり、相当量の鋼管と建機のビジネスが決まり、日鐵商事も初めてロシア向け共同商談の仲間入りをしました。日本政府のファイナンスビジネスで関係が出来たコマツ及び新日鐵の鋼管部隊に、西シベリアやウラルの石油会社からの単独引き合いを持ち込み、相当量

の受注を得た事も記憶にあります。

従来、ロシアのパイプライン敷設業者は建機を直接買い付けず、輸入公団経由でした。しかし、実際に敷設を行っている工事業者に建機の所有権留保付きのリース販売を持ち掛けたら、多くの敷設工事業者の関心を得る事が出来、最終的にリース販売で、コマツのパイプライン敷設用大型建機を総計1300台販売・納入するまでに建機ビジネスは成長しました。建機を納入した敷設業者より新規パイプラインの敷設計画の情報も入手出来、新日鐵の鋼管部隊から新しい質の違う情報との評価も受けました。

石油産業とは異なり、ガス産業はガスプロムが従来のシステムで運営していましたが、鋼管や建機等の購買と言う分野では変化が生じており、新たな購買/調達のシステムが出来つつありました。
具体的には、ガスプロムでパイプライン敷設計画がたてられると、ほぼ随契ベースで、工事契約がガスプロムより敷設業者に発注され、建機や必要とされる鋼管の買い付けまで、敷設を請け負うロシアの工事業者が行う体制になりました。この工事業者とは先に述べた所有権留保付き建機のリース販売で関係が出来ており、建機の納入や鋼管の納入に繋がりました。

鉄鋼メーカーの対応も徐々に変化し、従来のチャンネルに拘らない販売ルートも生まれ、日鐵商事も新日鐵の鋼管を単独で取り扱うことも可能になり、ヤマール半島から欧州向けの56インチのガスパイプライン用の鋼管を当社が単独受注したのもこのようなケースでした。

客先要求は塗装したパイプを敷設現場で引き渡せと言うもので、日本で造管後、マレーシアで塗装し、塗装鋼管をウラジオストック港経由、敷設現場近くで引き渡す条件を満たさねばならず、輸送/塗装のリスクを当社が引き受ける形で契約に漕ぎ着けました。

マレーシアやウラジオストック港に大勢のガスプロムの関係者を迎え、毎夜、何本ものウィスキーやウォトカを開けつつ、関係書類にサインを貰い、出荷や入荷の許可を取り、無事納入を行った事は懐かしい思い出です。

ロシアのパイプライン市場での建機や鋼管類の納入実績が多くなると、自然と関連した情報や要請が集まってくるもので、ガスプロムや石油会社にパイプライン用鋼管を納入していたロシアの造管メーカーからパイプ用厚板の引き合いが入るようになり、相当量の厚板の納入にも繋がりました。

今から振り返ってみれば、危なっかしい選択の連続でしたが、自分の生きた（敗戦の昭和20年に生まれ、今日迄）時代は、円の切り上げ、中東戦争、イランのパーレビ体制の崩壊やソ連のゴルバチョフ退陣も含めた体制の変革等、本当に揺れ動く時代であったと感じています。

このような時代なので多くの人が世界各地で様々な事態を経験したと思いますが、エネルギー産業とりわけパイプラインと言う切り口から世界を覗いた商社マンの思い出話としてこの随想を読んでいただければ幸甚です。

丸紅及び日鐵商事でほぼ半々の通算45年の商社マン生活でしたがその間に出会った鉄鋼メーカー及び商社の方々は数知れず、多くの方を思い出しますが、具体的な名前を記載したのはごく限られた方で、敬称を略させて頂きました。

最後に、ロシアでのビジネスに関わり、多くのロシア人やウクライナ人ともつきあった人間としては、現在のウクライナへのロシアの侵攻は誠に痛ましく思っております。国際世論の高まり等も利用しつつ出来るだけ速やかに、終結を見せて欲しいと思っておりますが、ロシア人のメンタリティーやプーチンの性格や手法を考えると、残念ながら、解決までには、まだ相当程度の時間がかかると感じています。　（了）

鹿島アントラーズ誕生のこと

髙橋　健二（元日鉄テクノロジー）

昨年末のサッカーワールドカップは、日本代表の劇的勝利にたいへん盛り上がりました。惜しくもベスト８進出は逃しましたが、Jリーグ設立趣旨で謳われた「オリンピック、ワールドカップに常時出場できるレベルにまで実力を高め、日本におけるサッカーのステイタスを向上させる」ことは実現しつつあるようです。

そのJリーグは今年30周年を迎えました。この機会に、Jリーグ発足当初から参加した鹿島アントラーズの誕生について、鹿嶋市民として経験、見聞したエピソードを書き綴ります。

１．陸の孤島・鹿島

鹿島アントラーズ誕生の背景に、鹿島地域の地理的、歴史的な要因があります。

鹿島には神武天皇の御代に創建されたと伝えられる常陸国一之宮・鹿島神宮があり、古来より栄えてきました。一方、地理的には東に鹿島灘、西に霞ケ浦、南に利根川と三方を水に囲まれ、鹿島に至る交通の不便さから「陸の孤島」とも呼ばれていました。

日本経済が高度成長期に入ると、鹿島灘沿岸の広大な土地と霞ケ浦の豊富な水を結びつけた鹿島開発がスタートし、1969年に鹿島港が開港して鹿島臨海工業地帯が誕生します。続いて1970年に鹿島線が開通し鹿島地域と東京が鉄路で繋がり、現在の鹿嶋市の基盤が出来上がりました。

また、鹿島開発に合わせ住友金属は東の拠点として鹿島進出を決め、1968年に鹿島製鉄所を開設、翌年に熱延工場が営業運転を開始し鹿島の地での鉄づくりがスタートしています。「全社の力で鹿島をつくろう」とのスローガンを掲げた一大プロジェクトで、鹿島進出を決めた時に日向方齊社長が鹿島神宮で引いたおみくじは、今も製鉄所に保管されています。

私は1981年住友金属に入社し、鹿島製鉄所配属となりました。鹿島製鉄所が開設して10年以上経っていましたが、当時の鹿島はまだ「陸の孤島」の雰囲気が色濃く残る時代でした。

大阪での入社式と研修を終え､仲間と共に初めて鹿島に赴いた時に、鹿島神宮駅行の電車が千葉駅を過ぎた辺りから街の明かりがどんどん減って、何とも心細い気持ちになったことを覚えています。誰もが無口になった頃、電車はようやく鹿島神宮駅に到着しました。

当時、市制施行前の人口５万人弱の鹿島町には、大規模店舗は勿論のことファストフード店も無く、若者が手軽に休日を楽しむ場所は殆どありませんでした。また、東京へは本数の限られた特急・急行電車で２時間、水戸までは車で１時間半もかかるので、気軽に出掛けることも儘なりません。たまに東京へ出掛けても、鹿島に戻る最終電車は両国駅発19時53分の急行電車でしたから、ゆっくりお酒を楽しんで東京を満喫する、という世界からは程遠い状況でした。

新入社員研修で「僻地手当が欲しい」という意見が出るほど、若者にとって魅力に乏しい地域であり、鹿島製鉄所では若者対策として、東京のビジネスホテルと提携し従業員が割安で宿泊できる制度

を設けたこともあります。

２．鹿島アントラーズ誕生

若者にとって魅力に乏しいこの地域を、若者が働き、遊び、定着する、賑わいのある地域にしなければいけないという思いは企業と自治体で共有され、その解決策が検討され始めた頃、日本サッカー界ではプロサッカーリーグ設立の機運が高まってきました。そして、日本サッカー協会から鹿島製鉄所を拠点とする住友金属蹴球団に、プロリーグ参加の打診があったのが1990年のことです。

時を同じくして住友金属は21世紀への指針「2000年ビジョン」を策定し、積極的な地域貢献を掲げていました。参加の打診を受け、プロサッカーチームの設立は鹿島地域の活性化に資すると決断、参加の意思を表明します。

当時、住友金属蹴球団は日本リーグ２部で、プロリーグ参加のためにチーム実力を高めるのはもとより、専用スタジアムの確保など高いハードルが幾つもありましたが、茨城県や鹿島地域の自治体、地元企業、住民が一体となって準備を進め、1991年2月に参加が認められます。

さらに、サッカーの神様・ジーコの入団も決まります。ジーコの招聘はサッカーファンに衝撃を与えたようで、私が勤務していた冷延工場の什器入替え作業に来た若者が、「今度、ここのサッカー部にジーコが入るんだぜ」と興奮して同僚に話すのを聞き、ちょっと鼻が高くなりました。

チーム名は公募によって「鹿島アントラーズ」と決まります。この名前は鹿島製鉄所従業員のお子さんが応募したものですが、「アントラーズ＝鹿の枝角」は鹿島の地名や鹿島神宮に繋がりますし、チームの勇猛果敢さも表現していて、鹿島を本拠地とするチームにふさわしい名だと改めて思います。

カシマサッカースタジアム全景

アントラーズクラブハウス

３．熱狂から身近なチームへ

そして、1993年5月16日にアントラーズのJリーグ開幕戦がカシマサッカースタジアムで行われます。対戦相手は名古屋グランパスエイト。対戦前の予想をひっくり返し、アントラーズは5-0で快勝しました。

私はビールを飲みながらテレビで観戦していましたが、ジーコがハットトリックを決め、アルシンドが2点を上げた試合は、サッカーファンでなかった私でさえ興奮する内容でした。それからアントラーズは勝ち星を重ね、Ｊリーグ元年のファーストステージを制します。

アントラーズの快進撃は町全体を熱狂の渦に巻き込みます。カシマスタジアムでアントラーズの試合が開催される水曜日は、製鉄所からも大勢の人が応援に行くので、定時を過ぎるとあっと言う間に事務所はガラガラになるほどでした。観戦チケットの入手が困難になるほどの人気で、開幕前に売り

カシマスタジアムの熱戦

出された観戦パスはプラチナパスとなり、アントラーズに寄付するくらいの気持ちでパスを購入した私は、仲間から随分と羨ましがられたものです。

小さな町ゆえに買い物や食事の時などでアントラーズの選手と出会うことも多く、選手の皆さんが段々と身近に感じられるようになりました。私は長女がサントス選手のお子さんと同じ幼稚園でしたので、幼稚園の運動会に一緒に参加したことがあります。お子さんの前では私たちと同じ普通のパパも、リレーで見せた足の速さはやはり一流のサッカー選手でした。

時を経て曽ヶ端選手のように鹿島で生まれ、鹿島で育った若者がアントラーズで活躍し始めると、アントラーズは我がチームとして、ますます身近な存在となりました。

４．アントラーズ誕生の成果

1995年に鹿島町と大野村が合併し鹿嶋市が誕生します。1989年に営業を開始した高速バスが日中は20分毎、朝夕は10分毎に鹿島と東京を繋ぎ、大規模店舗もファストフード店もできて「陸の孤島」は解消されました。

カシマスタジアムで３試合が行われた2002ワールドカップは、各国サポーターの熱量を肌で感じるビッグイベントでした。開催記念として、子供達が集めた砂鉄を地元有志がたたら製鉄で鉄塊にし、それを鍛錬・整形・研磨して「平成の大直刀」も作られています。

アントラーズが身近になったことでサッカーの裾野は広がり、1995年以降の高校サッカー選手権には鹿島高校が６回、鹿島学園高校が１１回、茨城県代表として出場しています。アントラーズ誕生で目指したプロサッカーによる地域の活性化は、上手くいっていると感じます。

ショッピングセンター内ジーコ広場

数年前の催しで、アントラーズ誕生時の教育長にお話を伺ったことがあります。「アントラーズがもたらした教育への効果は何でしょうか」とお聞きしたところ、答えは「子供たちが鹿島に誇りを持てるようになったこと」でした。かつては修学旅行で県外に行って「鹿島から来た」と言っても、殆どの人は鹿島を知らなかったが、今は鹿島と言えばアントラーズの鹿島と、すぐに分かってもらえるようになり、子供たちは寂しい思いをしなくて済むようになった、と話されていました。子供たちが誇りを持てる、これこそがアントラーズ誕生による最大の成果でしょう。

鹿島アントラーズが誕生して30年が経ちました。アントラーズによる地域の活性化は成果を上げつつも、「若者が働き、遊び、定着する、賑わいのある地域」という当初の目標には、まだ道半ばです。あの頃に比べ地域を取り巻く環境は大きく変わり、課題はより複雑になっています。一段と険しくなった目標に向かって、アントラーズがどのように進化し、地域がどのような変貌を遂げるのか、これからも一市民として見守り続けたいと思います。

尚、本文を書くにあたり、鹿嶋市と鹿島アントラーズＦＣのホームページを参照させていただいたことを付記します。　（了）

山内卓総務副委員長、Monday Forumを語る

（取材協力　産業新聞社　植木美知也記者）

鉄鋼業の幅広い分野から企業ＯＢや現役の役員・社員が集う親睦団体のアイアン・クラブは、65歳以下に限定した双方向型の講演会「マンデーフォーラム」を月に1度開催している。若手メンバーの参加を促す取り組みの一つで講演会後にフリーディスカッションの時間を長く設け、活発に意見を交わす場となっている。総務委員会の山内卓副委員長（元三井物産副社長）は「参加者が積極的に交流し、刺激を受け、リピーターも多い」と語り、現役社員や賛助会員の参加を歓迎している。

――マンデーフォーラム開催の経緯から。

「アイアン・クラブは稀有な存在だ。業界のメーカーと商社と流通が加盟している団体は他の業界にないが、ＯＢ組織は高齢化していくので若手の参加が少ないと細っていく。若い方にアイアン・クラブのイベントを経験してもらい、退職した後も参加してもらえるようにしていきたい。相対的に高齢者向けのイベントが多く、敷居が高いイメージがあり、現役の世代が参加できるイベントが少なく、退職と同時に退会するケースもある。アイアン・クラブ活性化プロジェクトを立ち上げて総務委員会の矢島勉委員（元ＪＦＥスチール副社長）を座長に、若手が新規に加入する魅力ある会にしようと2021年末から22年春の間検討を重ねた。60歳定年後の再就職などで65歳まで勤務する方が増えているのでターゲットを65歳までの現役に絞った新たな企画を考え、マンデーフォーラムの開催を決めた」

――マンデーフォーラムのコンセプトは。

「65歳以下の若手会員に限定した双方向型の講演会で参加者の人数は最大25人までと1回の参加人数を制限した。講師を招いて講演を聞くとともに講師と参加者あるいは参加者同士で意見を交換し、議論する形式とした。昨年9月に第1回を開催し、毎月1回月曜日の午後6時30分から8時まで鉄鋼会館（東京都中央区）で行っている。録音・録画は禁止、議事録は残さない、講師や参加者の発言は口外しないとルールを3点設定した。オフレコで本音で話し合う場にしている。講師は第一線で活躍する経営者や官学界などの有識者を招聘し、テーマは時代の潮流をどう捉えていくか、10年後の近未来はどのような社会になると考えているか、日本および世界の喫緊の課題とその解決法は何かなど多彩だ」

――これまでの講演の内容は。

「第1回は鈴木幸一・ＩＩＪ代表取締役会長でテーマは『国家戦略を欠いた日本のＩＴ』。以後のテーマは、ダイバーシティ・ICT・DX・働き方改革・経営者という仕事・企業成長戦略・治安と危機管理・創薬の技術革新・人口問題等々多岐に亘っている。講師には講演をするというよりもアイアン・クラブの若手経営者や役員・部長クラスと双方向の意見交換をしたいという方を招聘しており、7月以降もフォーラムの趣旨に御賛同頂いた講師に登壇して頂く予定であり期待してもらって良い。（講演者と演題リスト添付参照）。講演は30分間で資料を準備せずに口頭だけでもよく、講演後に1時間のフリーディスカッションの時間を設けて参加者と議論し、問題を一緒に考えていただくよう講師にお願いしている。仕事に直接関係する話もあるし、仕事に直接関係しないが他では聞けない話、仕事を離れたところで好奇心を刺激する話も多く、開始した当

初は『1時間もフリーディスカッションが続くだろうか』と心配したが時間オーバーする回もあり杞憂だった。参加者へのアンケートで9割の方から評価され、出席者の半数がリピーターであり、ほぼ毎回参加する若い方も増えている」
「現役の社員は忙しいが、月に一度、仕事を離れて別の業界の方と交流する機会を持つのは良いことと思う。ネットで情報を得るだけでなく、有識者や参加者から直接意見を聞くのは価値がある。アイアン・クラブのイベントに参加したことがない鉄鋼メーカーや商社の執行役員や部長クラス、子会社の社長を務める50歳代から60歳代前半の方々がマンデーフォーラムに参加して頂いており、特に自由討議の時間を高く評価する声が多い。最後の15分間は名刺交換をしながら雑談形式で個人的に質問をしたり、意見を語る時間になっている」

――鉄鋼メーカーや商社だけでなく、流通や加工業など賛助会員の多くの方の参加も期待している。
「鉄鋼業界を支えている方々であり、マンデーフォーラムには賛助会員の若手経営者や幹部社員の方々にも参加いただいている。65歳以下と年齢を限っているので参加しやすくなっていると思う。広い層でアイアン・クラブを支えていこうという観点から賛助会員の方の参加は意義が高い。賛助会員の若い社員の方にもぜひ参加してもらいたいと思っている」

講演者と演題（敬称略）

回数	期日	講師名	テーマ
1	令和４年９月	鈴木幸一（㈱ＩＩＪ代表取締役会長）	国家戦略を欠いた日本のＩＴ
2	１０月	伊岐典子（公益財団法人２１世紀職業財団会長）	ダイバーシティ＆インクルージョンの現況と課題
3	１１月	佐相秀幸（東京工業大学特任教授、富士通㈱元副社長CTO）	ICTの潮流と産業
4	１２月	南部智一（住友商事㈱代表取締役副社長執行役員CDO）	総合商社の構造改革とDX
5	令和５年１月	松井透（三井物産㈱代表取締役常務執行役員）	Work X。新しい時代へ。世界のエネルギー需給見通し
6	2月	瀬戸欣哉（㈱LIXIL代表執行役社長兼CEO）	経営者という仕事
7	3月	岩谷直幸、柿元雄太郎（マッキンゼー日本）	新規事業構築を含めた企業の成長実現アプローチの考察
8	4月	髙橋清孝（元警視総監（第92代）・元内閣危機管理監（第20代））	日本の治安と危機管理
9	5月	山田尚文（中外製薬㈱取締役上席執行役員）	科学・技術の革新と新薬創出
10	6月	是川夕（社会保障・人口問題研究所国際関係部長）	移民・国際労働力移動と日本の人口問題
11	7月	大久保孝一、外賀知明（有限責任監査法人トーマツ）	DX/AI活用による監査手法の進化、
12	令和5年9月11日	守島基博（学習院大学経済学部教授）Ⅰ	戦略人材不足と組織力開発
13	令和5年10月30日	守島基博（学習院大学経済学部教授）Ⅱ	Ⅰの課題の解決方向について
14	令和5年11月20日	梅本宏彦（セイコーウォッチ㈱元代表取締役副社長兼COO）	（仮）逆風下でも凧をあげるのが経営者
15	令和6年1月22日	三村明夫（理事長、日本商工会議所前会頭）	（仮）日本の課題と底力
16	令和5年2月19日	堀埜一成（㈱サイゼリア元社長）	未定

☆賛助会員企業の横顔☆

五十鈴株式会社　協力：産業新聞社

五十鈴（本社＝東京都千代田区、鈴木勝社長）は国内最大手のコイルセンター。関東・東海に８拠点の工場を展開し、年間１００万㌧の加工能力を有する。自動車や電機向けの薄板加工・販売を手掛け、ハイテン加工をはじめとする高い技術力と安定した生産基盤で、ものづくり産業を支えている。

１９５２年、鈴木勝社長の祖父・實氏が東京・神田で創業。薄板の将来性に目を付け、特約店として「五十鈴鋼材」を立ち上げた。高度成長期を迎えると、薄板需要は期待以上の伸びを示し、安定的な加工・在庫機能を求める鉄鋼メーカーとユーザー双方のニーズに応える形で、矢継ぎ早に拠点網を拡充。現在の１００万㌧体制を一気呵成に築き上げた。

長きにわたり業界のけん引役を担ってきた同社だが、その競争力の源泉は「人財」にほかならない。同社には「人はコストではなく資産」という独自の価値観が根付いており、早くから人材ではなく「人財」という言葉を用いてきた。

今でこそ「人的資本経営」という言葉が叫ばれているが、五十鈴では80年代から組織開発に取り組み、社員のパフォーマンスを最大化するには何が必要かを突き詰めてきた。

その陣頭指揮を執ったのが二代目社長の貴士氏（現顧問）。80年に三菱商事を退職し、父が興した五十鈴に入ると、人財の価値向上を目指し、社員教育に惜しみなく投資した。さらに各拠点を分社し、成長・活躍の場を与え、最終的に経営者にまで育て上げる「分社経営」を導入。コイルセンター事業で培ったノウハウを基にした技術支援、コンサルティング、システム開発などのソリューション事業も立ち上げた。

「人間は教える時に最も学ぶ」と貴士顧問は語る。同社では新入社員教育が終わると、今度は指導係としての研修が用意されており、各階層で教える側と教わる側を両方経験しながら連続的に成長できる教育制度を確立している。

昨年、創業70周年の節目の年に貴士顧問の長男・勝社長にバトンが託された。新体制となった同社は〝第三の創業〟に向けて「かわらないこと。かえていくこと。」をキーワードに掲げる。「人財」に代表される価値観や理念を守りながら、これまでもそうであったように絶えず時代に合った組織への変革に挑み続ける。近年はＳＤＧｓ推進や地域社会との連携にも力を入れており、今後も時代を先取りする経営を実践していく方針だ。

社員とコミュニケーションを取る鈴木勝社長

今年リニューアルした本社オフィス

「賛助会員企業の横顔」について
アイアン・クラブの活動は、多くの賛助会員の協賛金に支えられています。
賛助会員企業の事業や特色などをシリーズで紹介していきます。
本シリーズにあっては、鉄鋼新聞社、産業新聞社にご協力を頂いております。

☆賛助会員企業の横顔☆

エムエム建材株式会社　協力：鉄鋼新聞社

エムエム建材株式会社（本社・東京都港区、社長・温井健夫氏）は、三井物産、三菱商事、双日の総合商社３社を源流に持つ鉄の専門商社。鉄スクラップなど製鋼原料の取扱量も国内トップクラスを誇り、「建物の解体から建設まで一貫して携われる強みを生かし、低炭素循環社会の実現に貢献する」（温井社長）。

前身の一つ、三井物産鉄鋼建材の設立は1993年。翌94年に日商岩井鉄鋼建材が設立され、2004年にはエムシー・メタルテックと統合してメタルワン建材となった。2014年11月に同社と三井物産スチールの国内建材・冷鉄源事業が合流して「三井物産メタルワン建材」が誕生。１年後、現社名に改称した。現在の株主会社はメタルワンと三井物産で、出資比率はともに50％。

国内建材市場の長期的な縮小を見越した再編だったが、統合後も着実に業績を伸ばしてきた。直近2022年度の売上高は前期比６％増の8,119億円、経常利益は７％増の76億円と増収増益を果たしている。

本社：汐留シティーセンター

手厚い陣容も特筆すべき点。23年4月時点の従業員数は単体で約630人、子会社のエムエム建材販売やエムエム建材西日本、エムエムステンレスリサイクル、エムエム建材エンジニアリングを合わせた連結で約1000人の陣容を誇る。

事業分野は「建設鋼材」と「製鋼原料」の二つ。建設鋼材では、鉄骨工事請負や形鋼などの条鋼・棒鋼・土木建材の加工・トレーディングを幅広く手掛ける。建築物の脚中部柱脚に用いる鉄骨部材「ベースパック」やシステム建築も取り扱う。

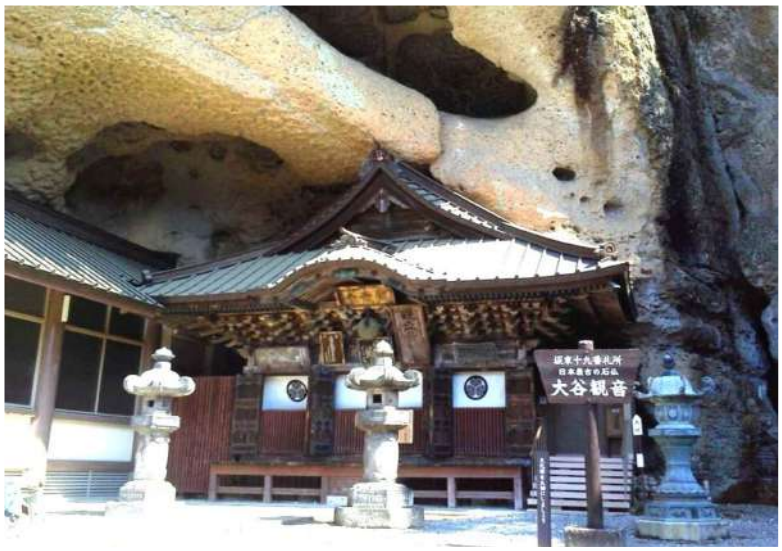
製鋼原料は、脱炭素社会の実現に欠かせない鉄スクラップやステンレススクラップの国内・輸出入取引を中心に、銑鉄や還元鉄、合金鉄なども取り扱う。特に鉄スクラップは全国のディーラー約1000社とのネットワークを活用し、高炉・電炉メーカーに納入している。グループ総合力を活かした再開発など大型プロジェクトの情報力を武器に解体スクラップの集荷に注力し、国内業界での取扱実績は最大規模を有する。

春の名所・旧跡散策バス旅行の記

４月７日、２４名の参加者で宇都宮市の大谷寺（おおやじ）と大谷石採掘場跡地下空間（大谷資料館）を訪ねるバス旅行を実施致しました。

いつ雨が降り出してもおかしくない天候の中、バスは９時定刻に東京駅丸ビル前を出発、１１時半頃、宇都宮市に到着、高台にあるレストランで昼食後、最初の目的地である大谷寺に向かいました。車窓から民家の塀や蔵に大谷石が使われているのが散見され、まさに地産地消この地域ならではの風景が印象的でした。

さて、大谷寺ですが平安時代初期、弘法大師の開山と伝えられるお寺で坂東三十三観音霊場の第十九番札所に指定されています。このお寺の最大の見どころは洞穴の中に観音堂を建立している洞穴寺院であるところです。本尊の千手観音（高さ4.5ｍ）を取り囲むように釈迦三尊、薬師三尊、阿弥陀三尊の全部で十体の仏像が岩壁に彫られているのです（摩崖仏）。 中でも千手観音は往時には色々な色彩が施され、一番表には金箔が押され金色に輝いていたと言われ、訪れた巡礼者はその華麗さに大いに驚き感動したのではないでしょうか。



大谷寺の観音堂（大谷寺HPより）
背後に洞穴、右側の階段入り口から入り、
10体の摩崖仏を拝観しました。

千手観音（大谷寺HPより）
大谷寺の本尊・重要文化財

平和観音と参加者の皆様

大谷寺の裏手に平和観音があります。太平洋戦争の戦没者の供養と世界平和を祈願して戦後昭和２３年から６年かけて大谷石の採掘場跡の岩壁に彫られた高さ27ｍの大観音像です。付設された階段で展望台まで登ると街並みを一望出来るようになっていました。

その後、バスで数分の大谷石採掘場跡の地下空間（大谷資料館）に移動しました。ここは1919年から1986年まで約70年をかけて大谷石を掘り出して出来た巨大な地下空間です。ガイドさんの先導で地下への階段を下りていくと、広さ150ｍ×140ｍ、深さ30ｍの巨大空間が眼前に拡がりました。ライトアップが巧みに施され、初期の頃の手堀り、後期の機械掘りの跡がくっきり浮かび上がっているなど幻想的な雰囲気です。興味深い事にこの空間はその特質を利用して様々に使われてきた歴史があります。その広さと秘密保持が可能な事から戦時中には中島飛行機の地下軍需工場、陸軍の地下秘密倉庫として使われ、地下で温度が１年中低温（平均８度）で安定している事から昭和40年代には政府米の保管庫として利用された事もあるそうです。更には抜群の音響効果がある事から色々な音楽コンサート、演劇、テレビ番組の撮影等が実施されていると言うのです。約１時間の見学を終えた後、近くの”道の駅“に立ち寄り、皆さん、餃子・苺・アスパラガス等のお土産を買い求め帰路につきました。

ライトアップされた広大な地下採掘場跡の一部

貸し切りバスを使っての散策は、コロナによる中断もあり、8年振りに実施しましたが御参加の皆様のご協力、阪急交通社のガイドさんの好リードにより、滞りなく終了する事が出来ました。又、今回２４名の内７名もの方々に初めて参加戴いたことは今後の行事を進めていくにあたり、大変喜ばしいことでした。第二事業委員会では引き続き１０月の秋の旅行（東北の旅）、１１月には自然観察を実施致しますので奮ってご参加いただきたく宜しくお願い致します。今後ともアイアンクラブ会員の皆様が “群れて楽しむ” 場を提供すべく活動を続けてまいります。

（色川 史郎・記）

千葉の会：市川真間の歴史と里見公園の探訪

＜令和５年５月１３日＞

矢島　勉

千葉の会（地域の会）では、初の行事として市川市の北部にある国府台地区の散策を開催いたしました。参加者は15名、９０歳の君嶋大先輩（元川鉄）を始め渡辺さん（元三菱）、大西さん（元川鉄）、北野さん（産業新聞）に加え若手、事務局、幹事役メンバーと家族の盛りだくさんとなりました。

10時に京成国府台駅に集合、真間川経由手児奈霊神堂、弘法寺、松戸街道経由里見公園（バラ園でしばらく散策）、ジュンサイ池公園経由石井農園にて昼食のコースで、徒歩約2時間で14時解散となりました。

当日の天候はやや雨が心配されたので、臨機応変でルートの変更も考えましたが、君嶋先輩のお元気と前半の天気に恵まれ、ほぼ事前予定通りとなりました（実は3月下旬に花見を兼ねて幹事役メンバーで下見）。

案内と説明は地元の近藤さんが相当詳しく行われ、同じ千葉県在住の小生も興味深く拝聴いたしました。＜別紙が当日用意された説明メモです。ぜひご一読ください＞

会費は２千円・人で一人千円の補助をいただきました。

特に里見公園のバラと緑豊かな環境に、後半少し雨に打たれてしかも初めての行事でしたが、参加された方は満足していただけたのではと思います。

これからも地域の会行事は、アイアン・クラブとスケジュールとの連携を取りながら、いろいろ模索してゆきます。当面は「卓話の会」、このような「地域散策の会」、「気軽な遊びの会（ゴルフなど）」などをゆったりと検討するつもりです。

幹事についても必要に応じ増やして、幅広く方向を模索しながら前に進みたいと考えます。

千葉県在住のみならずご興味をお持ちの方はぜひ参加していただければと思います。

皆さんのご参加を大歓迎いたします。

以上

＜参加いただいた方＞（敬称略）

君嶋英彦、大西建男、渡辺徹、北野義正、羽矢惇、平山喜三 、
矢島勉、近藤裕行・圭子、田辺俊秀、細貝清司、田中秀一、
井田裕之、熊谷史子、増嶋桂子

（別　紙）

ようこそ市川、歴史の町へ

1.下総国府・国府台
昔の東海道は、六浦（神奈川県）と富津を結ぶ走水の海がその一部で、現在の東京下町は湿地で人が定住できる状態ではありませんでした。そのため京都に近い上総が現在の市原市近辺で、市川が下総となりました。ちなみに更科日記に登場する上総の国府は、市原市役所のある丘です。なお、ヤマトタケルの東征時に江戸川を越える道案内をコウノトリがしてくれた故事にちなみ「鴻之台」とも表示されます。現在の体育館のある場所が国府のあった地点と比定されています。

2.真間の手児奈と周淮（スエ）の珠名
万葉集には手児奈の他に千葉県の女性が、「高橋虫麻呂」によって歌われています。それが周淮（現在の君津・富津周辺）の珠名です。「胸分けの広き我妹の腰細のすがる乙女・・・・・・・」（お読みになればわかりますが、すがるは蜂のようにくびれている・・・。）で男どもは用もないのに家の前に集まりはやし立てていると。いつの時代も！それに比べて手児奈の純真さは！

3.万葉時代における市川の地形
当時は今より３ｍ以上海水面が高く、現在の総武線が東京湾の水際でした。また船橋方面から市川に砂州が張り出し（おおむね現在の千葉街道）、その北側は内海で、国府台・国分寺の丘の麓も海でした。「真間」とは古語で、「崖の迫った水辺」という意味です。その砂州と国府の間に細い砂地が伸びて、その水の上に「継橋」が掛けられました。

4.市川市の誕生
昔の利根川と渡良瀬川は江戸川に合流して江戸湾に流れていました。市川の地名には関東で第一の川（いちの川）と川に沿って市場が定期的に立ったからとの2説があります。戦前に市川町・国分村・八幡村・下総中山村が合併しましたが、市名がなかなか決まらず、どの方向から読んでも同じとの理由で「市川市」となりました。

5.永井荷風と市川
荷風は昭和22年に熱海から親戚の杵屋五艘の家族とともに菅野に引っ越し、昭和34年に亡くなるまで約１2年過ごしました。なかなか気難しい性格から4回転居しました。ただ当時の市川の風景が昔の向島を思い出させる田園風景で、たいへん気に行っていたようです。真間川周辺を散策した「葛飾土産」、亡くなるまで書いた日記「断腸亭日乗」をお勧めします。

6.弘法寺（ぐほうじ）
７３７年に行基上人が手児奈の菩提を弔うために設立されたと伝えられています。同じ時期に国分寺が建てられていますので、何らかの関連があるかもしれません。江戸時代には紅葉の名所として名たく、水戸黄門・一茶・蜀山人など数多くの文人が訪れました。楼門・鐘楼・伏姫桜（残念ながらおばあさん）など見事です。現在はこの地の例にもれず日蓮宗となりました。また上田秋成の「浅茅が宿」にはこの真間村が登場します。

7.里見公園（城址）
この地は標高２５ｍ程度の舌状丘陵の先端にあり、戦国時代に太田道灌が築いた城塞のあとだと言われています。１６世紀に２度にわたり、小田原北条と里見・千葉・古河公方が戦う、国府台合戦が行われました。また頼朝が安房上陸のあと、周辺の武士（上総の介など）を招集した場所で、彰義隊の戦いで敗れた幕府軍の再結集の場所ともなり地政学的にも重要であったようです。２度の合戦で周辺住民も大きく被害を受け、再び戦いをしてほしくない気持ちで「矢切」と地名を付けました。戦後整備されて「里見公園」となりましたが、特に5月のバラは見事です。

8.ジュンサイ池緑地と石井農園
国府台と国分寺のある丘に挟まれた昔のため池（ジュンサイを栽培）を昭和５７年に公園として市が改造、標高は１０ｍだが縄文時代の海岸であった模様。２つの池と東側斜面に天然の林を配し、四季いつでも花と緑を楽しめる市川市民の憩いの場です。この五月は新緑がまぶしいほどと思います。
このすぐ傍に石井農園があり、スイス留学で修行したご主人による花に囲まれたレストランで、無農薬野菜のサラダと千葉県を形をしたカレーとビールをいただきましょう。

以上（近藤裕行）

千葉の会：国府台探訪記

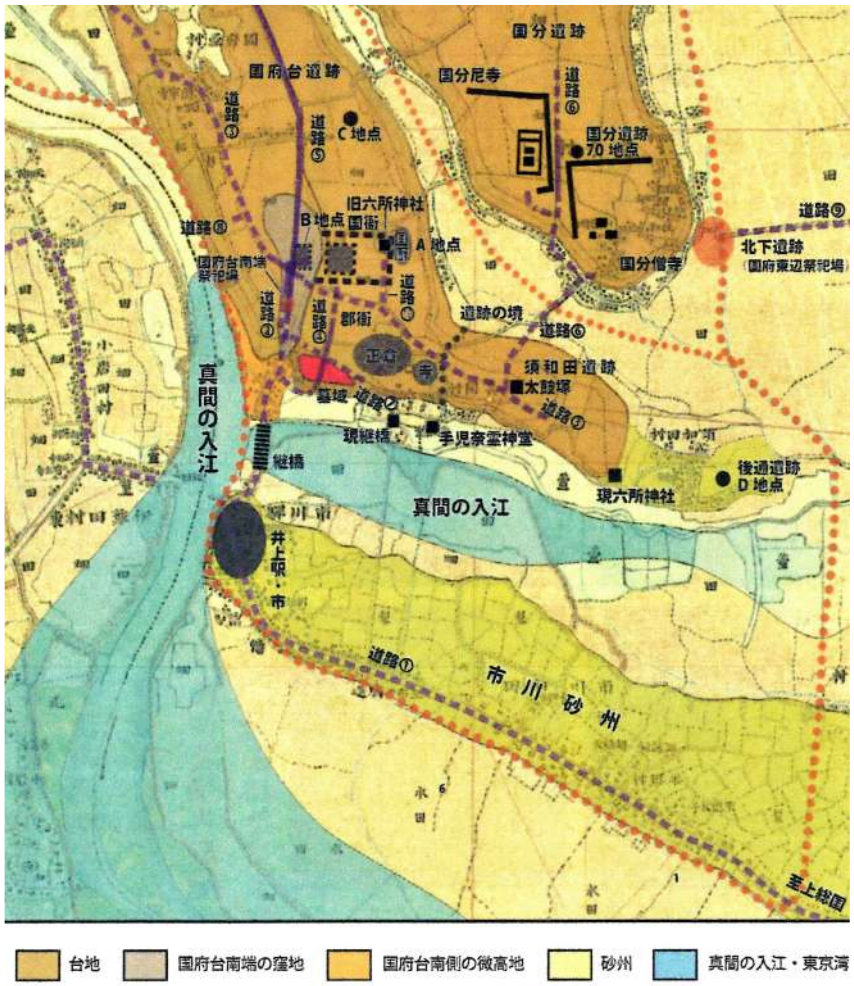
田中　秀一

「葛飾の真間の浦廻(うらみ)を漕ぐ船の　船人騒ぐ波立つらしも」（東歌『万葉集』）…広々とした眺めの中、行き交う船や人々が見えるようだ。

「千葉の会」第一回は、市川市の国府台(こうのだい)である。千葉在住の縁でその端に加えて戴いた。ささやかながらその行程の所々を記す。

令和5年5月13日(土)の朝10時、京成電鉄国府台駅に最長老の君嶋さんをはじめ14名が集まった（のちお一人加わって総勢15名）。矢島さんのご挨拶の後、近藤さんよりコースの概要説明。近藤さんはその後も要所要所で詳しい解説を施された。いつ降り出すか分からない空模様ではあったが、その時はその時とおおらかに出発。

その昔、北から伸びた国府台の台地は南を海に面していた。その先には大きな砂州（市川砂州）があって、砂州と台地の間は東へ深く入った入江になっていた（真間の入江）。国府台に置かれた下総国府と上総国府（市原市）とを結ぶ官道は市川砂州上を通っており（今の国道14号線）、砂州西端の「井上駅(いかみのうまや)」から台地に登るルートには橋を掛け渡していた（真間の継橋）。東国で「まま」は急な崖を意味したらしく台地崖下の一帯を真間と呼んだようだ。



台地の西側は江戸川だが、当時は太日(ふとい)川とよばれていて、まだ銚子に注いでいなかった利根川の主な下流であり、当時ここはその河口であった。

この地形から市川砂州西端地域は水運（河と海）と陸運の要衝で、多くの人々が行き交い、古くから市が立った。「市川」は市と太日川の関りを示す地名といわれる。また、国府台なる地名については、ヤマトタケルが太日川を渡る際、水鳥の鵠(こう)（コウノトリ説も）が瀬を教えてくれたという説話が残っている。

『更級日記』を書いた菅原孝標女（当時13歳）も、上総介だった父の帰任の際、井上駅から国府台を通っている。上総からついて来た見送りの人々と「まつさとのわたりの津」（松戸市）で別れ、太日川を渡って武蔵国へ向かった。

地図の出典：市川市発行「市川市史 歴史編Ⅲ」より

国府台駅から北へ歩き、真間の入江跡に残る真間川に出て右折、堤を川沿いに大門通りに出て左へ。入江橋を渡ってすぐのところに改架された「真間の継橋」、その先に貴重な真水が出たという「真間の井」、「手児奈(てこな)霊神堂」、「亀井院」がある。

…葛飾の真間の手児奈が 麻衣(あさぎぬ)に青衿(あおくび)着け 直(ひた)さ麻(を)を裳(も)には織り着て 髪だにも掻きは梳(けづ)らず 沓(くつ)をだに はかず行けども 錦綾(にしきあや)の中に包める斎(いは)ひ児も 妹に及(し)かめや　望月(もちづき)足れる面(おも)わに花のごと笑(ゑ)みて立てれば 夏虫の火に入るがごと…〔余多の男たちの人気をさらった手児奈だったが〕…いくばくも生けらじものを　何すとか　身をたな知りて…〔命を絶った。〕

〔反歌〕　葛飾の真間の井見れば 立ち平(なら)し 水汲ましけむ 手児奈し思ほゆ

（高橋虫麻呂『万葉集』）

「手児」は東国語で娘子(おとめ)「奈」は愛称と犬養孝『万葉の旅』にある。いつも水汲みに来ていたというこの質素で美しい娘子の伝説には、どこかひとを引き付けるものがある。

大門通りに戻って急な石段を上がると「弘法寺(ぐほうじ)」。見晴らしがいい。天平9年(737)、行基が真間の手児奈の霊を供養するために建立した(当時は求法寺)。鎌倉時代、時の住持が、千葉頼胤家臣で日蓮の有力檀越であった富木(とき)常忍と問答の末やぶれ、日蓮宗に改宗したと伝わる。戊辰戦争では、東北方面へ逃れる土方歳三ら幕府軍が一時このあたりに逗留した。

深い緑に包まれた境内には、本堂や祖師堂のほか、大黒堂、鐘楼、仁王門、伏姫桜（樹齢400年以上の枝垂桜）があり、小林一茶や水原秋桜子などの句碑、更には古墳もある（市川市北部台地一帯は古墳や貝塚も多い）。

寺から西へひんやりとした切通しを下り（正面に江戸川）、松戸街道に出て北へ上がって行く。この辺りは、明治政府が国府台大学校設置を計画したものの西南戦争に伴う資金不足もあって立ち消えとなり、陸軍省が陸軍教導団を設置、その後兵舎や練兵場などが並ぶ陸軍の町として発展した。戦後は、跡地に大学などが設置されて学園都市に変貌。大学など様々な建物を眺めながら歩く。

国府台病院（元陸軍病院）の南辺りに国府があったとされる。石橋山で敗れ海路安房へ逃れた源頼朝は、治承4年(1180)官道を通って真間の継橋からここ下総国府に入った。ここで平(上総)広常や千葉常胤などの兵を集めて態勢を整え（3万余騎）、太日川を渡って鎌倉に向かった。

悪霊・悪疫の侵入を防ぐという藁製の「辻切の蛇」に挨拶して、里見公園に入る。この日は「いちかわローズフェア」開催日で多くの人で賑わっていた。雨に洗われて一層色鮮やかな薔薇の中を自由行動で暫く散策。

公園内に国府台城址がある。太田道灌の弟、太田資忠によって築かれたが、北条氏に代わって江戸に入府した徳川家康により、江戸を見下ろすとして廃城にされた。

ここは二度にわたる国府台合戦の舞台でもある。第一次は、天文7年(1538)古河公方足利晴氏を担いだ北条氏綱と小弓(おゆみ)公方

足利義明・里見義堯(よしたか)が戦い、里見義堯が義明を見捨てて離脱、義明は戦死して小弓公方が滅ぶ。永禄7年(1564)の第二次では、越後の上杉謙信と連携してここに進出していた里見義堯の子義弘と北条氏康・氏政父子が戦い、北条方が勝利。北条勢力が関東支配を一層強めた合戦であった。

このとき戦死した里見広次に、まだ12歳ほどの娘があった。父の戦死を聞いてその霊を弔おうとはるばる安房から駆けつけ、やっと辿り着いたそこは凄惨ないくさ跡。身も心も疲れ果てた姫は傍の石によろよろともたれ込み、小さな声で父の名を呼びながら幾日も泣き続けて、息絶えたという。その石が「夜泣き石」として今残っている。

国府台から東へ下り、下総国分寺のある台地との間にあるジュンサイ池へ。この頃になって少々雨脚がしっかりして来た。濃い新緑に包まれた池のみな面に雨の降りしきる様子が絵画のようでもある。

ジュンサイ池のある公園を出て、近くの農園直営レストランに入った。ビールで乾杯し、採れたて無農薬野菜のサラダとカレーをいただきながら、皆でワイワイと賑やかなひとときを過ごす。

自然と史跡が豊富な真間から国府台を皆さんと共に歩き、身体中の細胞も活性化した「千葉の会」のよき一日であった。

幹事の皆様、並びにご一緒させていただいたご参加各位に感謝申し上げて、筆をおく。　以上

（第49回）音楽鑑賞会

紀尾井ホール室内管弦楽団 第134回定期演奏会

4月21日（金）、突然の初夏のような気温の日の夕刻、紀尾井ホール室内管弦楽団（KCO）第134回定期演奏会を聴いた。翌22日（土）も含め、25名のアイアンクラブ関係者の方々が参加された。

当日の指揮は、2022年4月以来KCOの第3代主席指揮者を務めるトレヴァー・ピノック（Trevor Pinnock, 1946～、英国・カンタベリー生まれ）。また、コンサートマスターは千々岩英一である。

演奏曲目は、次の通り。

シューベルト（Franz Peter Schubert、墺、1797~1828）

イタリア風序曲ニ長調 D590

モーツァルト（Wolfgang Amadeus Mozart、独、1756~1791）

交響曲第35番ニ長調 K.385《ハフナー》

（休憩後）

シューベルト

交響曲第8番ハ長調 D944《ザ・グレイト》

この演奏曲目をみて、「これはピノックの解釈による『ウィーン特集』に違いない！」と勝手に思い込み、当日を迎えた。

さて、筆者の個人的な話で恐縮であるが、当日のひと月ほど前、馴染みの神保町を散歩していた折に、偶々立ち寄った本屋で、岩波新書の新刊が目にとまった。『「音楽の都」ウィーンの誕生』(ジェラルド・グローマー著、2023年)というタイトルである。「これは面白そうだな」と早速購入、一読した。

その内容は、社会学的な視点からの、かなりアカデミックな研究書に近い趣のものであったが、そこで強調されていたのが、18世紀末（特に1780年頃）から19世紀初頭までの時期に、貴族階級とブルジョアジーとの相対関係の変化から、「音楽の商品化の進展」による「音楽活動の多様化」が生じたということである。

そして、そうした環境の変化の中で、音楽家は収入源を、従来の貴族・教会階級への全面的依存から、それに加えて、より公開性の高い演奏会の開催を含めブルジョアジー階層にも拡げる必要に迫られる、という大きな変化の過渡期にあったということである。

開演時刻になるとKCOのメンバーがステージに登場する。この日は全員が黒に統一された衣装である。そしてメンバーが揃ったところでピノックが、これまた身体にぴったりの黒光りのする衣装で、背筋をピンと伸ばして颯爽と指揮台に上る。

シューベルトの『イタリア風序曲』は1817年、20歳の時の作とある。約8分の小曲だが、如何にも爽やかである。出だしは荘重だが、やがて軽快な旋律の美しい曲調となり、KCOの弦の響きの美しさが味わえて心地よい。

続いて、モーツァルトの『交響曲第35番』、4楽章で約22分の曲。1782~83年の作で、故郷ザルツブルグのハフナー家に爵位が授与されたことを寿ぐ作品といわれ、《ハフナー》と添えられるようである。華やかさを感じさせる序盤、そしてそれは迫力と同時に優雅さを感じさせる旋律の中盤に移る。そして後半は力強く、しかも凝った旋律で感興を高揚させ、大団円を迎える。弦の美しさと、ピノックのKCOと一体となった迫力ある指揮に、会場全体が陶酔していることが感じられる。万雷の拍手の後、休憩に入った。

後半はシューベルトの『交響曲第8番』、4楽章からなる。1826年の作とされ、強い意欲をもって創り上げた大作であるが、当時の楽壇からは歓迎されず公演の機会がなかった。シューベルトの死後、R.シューマン（Robert Alexander Schumann、独、1810~1856）によって評価され、漸く1839年にメンデルスゾーン（Felix Mendelssohn、独、1809~1847）の指揮により公演されたとのことである。幽玄を感じさせるホルンの音で始まり、やがて力強い響きに変わる。第2楽章では軽やかさと情景が目に浮かぶ旋律が心地よく、高揚する部分では特に金管楽器が多用され迫力を感じさせる。第3楽章では緊迫感を感じさせる演奏となり、第4楽章では、胸にある想いを謳い上げる情熱が伝わってくる。

ピノックの、端正だが熱のこもった指揮ぶりと、それに応えるKCOの熱演に、会場が一つになっていることが実感される。約1時間の大作であるが、その長さを全く感じさせない、聴衆を惹き込む魅力的な演奏であった。会場からの拍手は鳴り止まず、ピノックは両手を挙げてそれに応える。演奏を会場で聴く歓びを改めて強く感じさせる演奏会であった。

この素晴らしい演奏会を聴き、ただその音色に酔っていればいいということは承知しているが、また余計なことを考えてしまった。この演奏会には、実は隠された面白さがあるのではないか。それは、前半は、弦の美しさを強調し、優雅な趣を持つ曲を選び、宮廷・貴族の館・教会での演奏を聴く思いにさせ、そして後半では管楽器に活躍させ迫力ある演奏で、勃興するブルジョアジーの活力を感じさせる。つまり、これは演奏会全体を通じて、18世紀末から19世紀初頭の大きな時代の転換を表現するという狙いが潜んでいたのではないか、ということである。

そして、こうした時代の大きな変化を感じ取ることは、正に歴史の大きな転換点にいるとも言われる現代の我々にも、強く求められていることであろう。

こんなことに思いを巡らせてしまうのも、あの神保町で買った新書のためかも知れない。見事な演奏を聴き、感動を味わえることの幸せを感じつつ、帰宅の途についた。

（保倉　裕）

ウィーン少年合唱団公演　鑑賞記

この度、日墺文化協会のご厚意により、ウィーン少年合唱団の公演を楽しむ機会に恵まれた。この企画に、31名のアイアン・クラブの関係者が参加された。筆者は、6月15日の初台・オペラシティーでの公演を聴いた。

ウィーン少年合唱団は、高名な指揮者トスカニーニ（Arturo Toscanini, 1867-1957、伊）がこの言葉で賞賛したといわれる「天使の歌声」として広く知られている。設立は15世紀末とされるから、520年余の歴史を誇り、2017年にはユネスコ無形文化遺産にも登録されている。設立当初は宮廷・教会の行事での歌唱が主な役割であったと考えられるが、長い歴史の紆余曲折を経て、より広い範囲の聴衆を対象とする活動に発展し現在に至っている。

現在は、10～14歳の変声期前の団員・約100名で構成され、4つのグループを編成して活動している。各々のグループは、合唱団とゆかりのある大音楽家・シューベルト（Franz Schubert, 1797-1828、墺）、ヨゼフとミヒャエルのハイドン兄弟（Franz Joseph Haydn, 1732-1809、Michael Haydn, 1737-1806、墺）、モーツアルト（Wolfgang Amadeus Mozart, 1756-1791、墺）、ブルックナー（Joseph Anton Bruckner, 1824-1896、墺）の名前を冠しており、今回の日本公演は、「ハイドン組」である。

日本での公演の歴史も長く、初来日は1955年。また東日本大震災の折には、上記の4グループが合同で訪日し、チャリティー公演を行った。今回の訪日は4年ぶりである。

さて、会場は平日の夕刻にもかかわらず、ほぼ満席の盛況であるが、特に目を惹くのが聴衆の年齢層の広さである。これこそ、ウィーン少年合唱団の清新な魅力とともに、永年の地道な活動の成果だと、強く感じさせる。

ステージの中央には、グランド・ピアノが置かれている。そこに左右から白地に紺の襟の定番の衣装で少年たちが、大きな拍手に迎えられて登場する。客席からみてピアノの右に12人、左に11人の23人。そして、その中央で指揮とピアノ伴奏をするのが、グループを率いる楽長（Kapellmeister）ジミー・チャン（Jimmy Chiang）である。団員をみると、日系人を含め人種的にも多様であり、この合唱団の国際的な広がりと包摂性が感じられる。そして、ジミー・チャンの日本語での挨拶で演奏が始まった。

プログラムは、2部構成となっている。第1部は、合唱団の歴史を辿るように、モーツアルト、シューベルト、ハイドンなどウィーンゆかりの作曲家の作品、またクープラン（Francois Couperin, 1668-1733、仏）、ロッシーニ（Gioachino Antonio Rossini, 1792-1868、伊）、ビーブル（Franz Xaver Bieble, 1906-2001、独）といった作曲家の宗教色の強い楽曲がとり上げられる。これらの宗教曲は、静謐と力強さを兼ね備えており、流石に完成度が高いと感じさせる。そして第1部の仕上げはヨハン・シュトラウスII世（Johann Strauss II, 1825-1899、墺）の『ウィーンの森の物語』である。会場も「ウィーン少年合唱団を聴いた！」という雰囲気に溢れ、後半を迎える。

©www.lukasbeck.com.

第2部は、如何にも「日本公演」らしく、『旅愁』、『荒城の月』、『ふるさと』といった日本人に親しまれている叙情歌が美しく歌われる。また、『ラ・パロマ』のような馴染みのある曲や、2000年代初頭にヒットした『You Raise Me Up』（ラヴランド作曲、Rolf Lovland, 1955-、ノルウェー）など比較的最近のポピュラー・ソングも歌ってくれる。そして、最後は、ヨゼフ・シュトラウス（Joseph Strauss, 1827-1870、墺）のポルカ、そして兄のヨハン・シュトラウスII世の『美しく青きドナウ』で締めくくられる。これらは、合唱団の所謂「シグナチャー・ソング（signature song）」だろう。“ウィーン”を満喫させてくれる。

会場は、拍手が鳴りやまず、やはり「あの曲」を聴かぬと、収まらぬのであろう。アンコールの最後は、ヨハン・シュトラウスI世（Johann Strauss I (Vater), 1804-1849、墺）の『ラデツキー行進曲（Radetzky-Marsch）』。会場一杯の手拍子とともに演奏され、そして、万雷の拍手のなか、団員が名残惜しそうに聴衆に手を振り、ステージを後にした。

本当に楽しいひと時であった。　（保倉　裕・記）

©www.lukasbeck.com.

（第79回）囲碁大会

－ 金田守司氏　優勝 －

第79回囲碁大会は4月24日（月）12時半よりアイアンクラブの会議室と談話室を利用して行いました。前回は令和元年9月2日でしたから、実に3年半振りの囲碁大会となりました。参加者は12名で、皆さん久しぶりに対面する笑顔が印象的でした。

競技は従来通り各自１～３回戦（1回戦は抽選による対局、２回戦以降は成績順の対局）の3局を行いました。その結果、栄えある優勝は金田守司8段（元三菱商事）となりました。準優勝は杉浦登3級（元日本製鉄）、3位は坂本央人4段（元日本製鉄）が入賞されました。準優勝の杉浦登3級は初段に昇段されることになりました。

対局後、アイアンクラブ会議室に於いて表彰式・懇親会を行い、優勝者のご挨拶等を頂いた後、囲碁の話や最近のAI事情等話題は尽きず大いに盛り上がりました。

次回は9月25日（月）12時半より開催する予定ですのでお気軽にご参加下さい。最近囲碁教室等で級位者になったものの大会に出たことが無い方、以前囲碁をやっていて最近またネット対局を始めた方等大歓迎ですので宜しくお願いします。

最後に事務局の井田様、熊谷様そして元事務局の服部様には多大なご協力を頂き、この場を借りて感謝申し上げます。

（木村正文・記）

⌛ 囲碁大会優勝のご挨拶 ⌛

金田　守司

コロナの為にしばらく中断していたアイアンクラブの囲碁大会が再開されることになり大変嬉しく、事務局並びに幹事の皆様のご尽力に心より御礼を申し上げたいと思います。ここ２～３年はテレビの囲碁対局観戦が中心で、ほとんど碁を打っていませんでしたので、この日が来るのをとても楽しみにしていました。

大会では強豪の曽田展生六段、猪熊研二五段、坂本央人四段と対局させて頂き幸運にも優勝することが出来ましたが、勝ち負けよりも若い頃より大変お世話になって来た先輩の皆様方と久しぶりに碁を打たせて頂けるのが嬉しく、長時間夢中で盤面をのぞき込み続けて至福の時を過ごすことが出来ました。久しぶりに思い切って使ったせいか対局後に頭が痺れる様な心地よい疲れを感じましたが、最近様々な老化現象に悩まされている身として、「囲碁は脳に刺激を与え続けることが出来て、ボケ防止にとても効果が有る」と改めて実感した次第です。

これからも元気な内は囲碁を楽しみ、次の大会にも是非参加し楽しいひと時を過ごしたいと思っています。

山田清實委員長（左）と 金田八段（右）

第140回 麻雀大会（令和5年6月15日）

コロナパンデミックから3年が経ち、ようやく大会を再開する事ができました。大変有能な助け人の平山氏と共に東京駅、新橋駅、八丁堀駅周辺の雀荘を調査しました。が、従来から利用の雀荘「利一」が改装、雰囲気も一新、利便性もあり、ここで再開と決定しました。

柳島前第3事業副委員長から引き継いで、ようやく開催日を迎えましたが、なんと二組8名のみでの再開！開始案内日の遅れや、3年の時の流れの各個人の変化、更にはコロナあけ後の旅行等の計画にて、参加者の減少があったと推測し、幹事として反省しています。

さて、今回の大会8名と少ないながらも猛者ぞろいの雀士で、優勝はダントツの平山喜三氏＜新日鉄OB＞、なんと準優勝は90歳の君嶋英彦氏＜川崎製鉄OB＞。第3位は河村憲人氏＜新日鉄OB＞、ブービーは不肖、私でした。

今回大会からゲームの進行を新たに平山氏が考案し、集計や全員の成績表示をパソコンで処理、壁に投影できるシステムを井田事務局長と熊谷局員が考案され便利になりました。

◆追記　次回大会は9月21日、12月14日です。来年度からは4回/年の開催の予定。　（大西建男・記）

卍　麻雀大会優勝のご挨拶　卍

平山　喜三

優勝の平山氏（右）

６月１５日に久方ぶりに開催された第１４０回麻雀大会で３度目の優勝をさせていただきました。

今回から大西さんの下で麻雀大会のお世話役をつとめることになり、１１時には事務室に出向き準備状況を確認後、利一へ。万端整えて待ってもらっていました。大会の円滑な進行を祈りながら少し緊張もあったかと思います。

そんな心持ちでスタートした第１ゲームは大きな点数差がつかない展開、激しい鍔迫り合いが最後まで続きましたが、マイナスにはなったものの何とか２位で終えました。第２ゲーム、活発な場の展開もありましたが、私には風が吹かず、またもマイナスの３位。ただ累積は小幅のマイナスにとどまり挽回できるのでは！との感触はありました。第３ゲームは辛抱の種が芽を出し始めて、初めてのプラスでトップ、辛うじて第４ゲームでの１卓メンバー入りが叶いました。最終戦では配牌を見た瞬間に思い描いた展開ができるような牌運に支えられ、最後は２連続ハネマンあがりでゲーム終了と思いもよらない結末で、優勝という栄誉もいただき、この上ない幸運に恵まれた一日でした。

次回以降、より多くの皆さんにご参加いただき、腕を競い合っていただければと願っています。

第115回アイアン・クラブ ゴルフ会

2023年6月8日　金乃台カントリークラブ

6月8日（木）に、第115回アイアン・クラブゴルフ会を金乃台カントリークラブにおいて参加者26名（アウト4組、イン3組）により開催し、アイアン・クラブの三村理事長と岡副理事長にご参加いただきました。

今回は金乃台カントリークラブ入会審査委員長の後藤尚志氏のご紹介により、初夏の風が吹き渡る絶好のコンディションの中、初参加の岡氏（住友商事）、及川氏（住友商事）、田中氏（日鉄テックスエンジ）、井田氏（元日本製鉄）を加えた参加者26名全員が和気藹々とした雰囲気の中、ゴルフの腕を競うことができました。

金乃台カントリークラブは、2022年4月の改修工事により、フェアウェイ上の樹木を伐採する一方、バンカーを新設する等、全体的に広く、スッキリした印象の林間コースに生まれ変わっていました。腕自慢の方は距離の長いショートホールでニアピン賞を獲得されました。

プレー終了後、参加者26名による懇親会を開催しました。会の冒頭、長年アイアン・クラブ発展に寄与され、惜しくも6月にご逝去された馬渡氏に黙祷を捧げました。

引き続き、三村理事長、優勝の渡辺氏、準優勝の岡氏、3位の三村氏、初参加の4人からそれぞれご挨拶を頂戴し、明るい笑い声が響く中、定刻に散会しました。

次回のゴルフ会は8月17日（木）に龍ケ崎カントリー倶楽部の「シニア・レディス杯」に参加する予定です。会員の皆様の奮ってのご参加をお待ちしております。　（林　岳志・記）

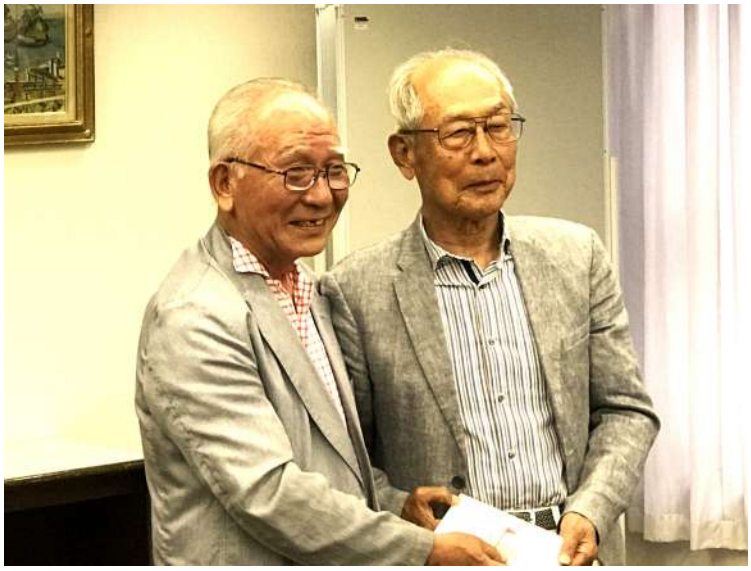
ゴルフ会優勝のご挨拶

えらいことが起きました！由緒ある第115回アイアンクラブのゴルフ大会で私が優勝したことです。アイアンクラブ在籍20年になりました。第二事業委員会で旅行担当を14年し、昨年80歳の区切りで御役目御免を願い出ましたところ、この度「優勝」と言う素晴らしい退職慰労を頂き感謝感激です。

最後のパットが入ればエイジシュートになっていたベスグロの後藤尚志さん・気負いなく、気持ち良く振り切る佐藤眞樹さん・芯をくったら250ヤードを超える豪打の及川毅さん御三方の足を引っ張った私が優勝とは申し訳ない気持ちで一杯です。御迷惑おかけしました。（グロス105で26人中17位。悪いスコアのトリプルボギー4ホール全て隠しホール、良いスコアのボギー6ホール中２ホールのみ隠しホール、残りはダブルボギー。悪い方は全て隠し、良い方は表にと悪運と言うか強運に恵まれハンディー33.2頂きました。ネット71.8でした。）

カートのスコア記入器のグロス順位はずっと20位前後でハンディーに恵まれてもネット3位以内は不可能、ワンオン無し、初参加の挨拶無しで、のんびりお酒をとパーティーへ。幹事の松野さんから成績表をいただき20位前後見たが名前無し、下の方を見ても無し、上に上がっても無いない。あったと見たら頂点でした。齢80にしてこれほど周章狼狽したのは初めて、本当に有り難うございました。

大会翌日の6月9日は、山の神は女子会ゴルフ。雨で中止となりましたが私の優勝の知らせを受けた女子会メンバーは「105叩こうが優勝は優勝だよね！」と一応祝福されましたが「雨が降ったのは、慣れないことをやった渡辺さんのご主人のせいだったんだ。」と納得したそうです。　（渡辺　徹）



山田委員長（左）と優勝の渡辺徹氏（右）

お　知　ら　せ

講演会の実績と今後の予定（敬称略）

回数	開催日	講師	演題
546	4月18日	古森 義久（産経新聞ワシントン客員特派員）	アメリカの内政、対中政策-ワシントン最新報告-
547	5月23日	小山 堅（日本エネルギー研究所専務理事）	激動の国際エネルギー情勢と日本の課題
548	6月19日	篠田 謙一（国立科学博物館館長）	古代ゲノムで解明する日本人の成り立ち
549	7月11日	小坂 文乃（日比谷松本楼社長）	辛亥革命秘話　孫文と梅屋庄吉
550	８月28日	北村 滋（前国家安全保障局長）	我が国をめぐる地政学的変化と新国家安全保障戦略
551	９月12日	一柳 良雄（元通産省、経営コンサルタント）	変革の時代に求められる元気と知恵の経営
552	10月6日	藤崎一郎（中曽根平和研究所顧問、元駐米大使）	（仮）米国および日本の政治情勢
553	11月14日	河野 克俊（第５代統合幕僚長）	（仮）日本の安全保障と新国際秩序
554	12月20日	寺島 実郎（日本総合研究所会長）	（仮）2024年への展望
555	1月16日	橋本 五郎（読売新聞特別編集委員）	（仮）安部晋三回顧録の裏話と現在の政治情勢
556	2月9日	阿古 智子（東京大学名誉教授）	（仮）中国。ロシア・米国の狭間で動く日本の針路
557	3月	原島 博（東京大学名誉教授）	（未定）

秋の旅行

秋の東北旅行はいかがですか。10月23日（月）～26日（木）三泊四日で、平泉・盛岡・三陸海岸を巡り、紅葉・世界遺産・温泉を楽しみます。まだ枠がありますので、ご参加はいかがでしょうか。

自然散策

11月16日（木）に、浜離宮恩賜庭園を散策します。潮入の池と二つの鴨場をもつ江戸時代の代表的な大名庭園です。築地場外市場界隈まで足を延ばします。みなさまの参加をお待ちしております。

音楽会（定期演奏会）

これからご案内予定の演奏会は、

・国際アマチュアピアノコンクール本選（日墺文化協会主催）9月16日（土）

・ニューイヤー・コンサート2024　2024年１月26日（金）、27日（土）、28日（日）

麻雀大会

６月15日（木）の第140回に引き続き、第141回９月21日（木）、第142回12月14日（木）を開催します。場所は「利一」、改装し換気もよく快適な場所になっています。

囲碁大会

第80回を９月25日（月）に開催します。こちらもご参加をお待ちしています。

ゴルフ大会

８月17日（木）夏季ゴルフ会　龍ヶ崎カントリー倶楽部

10月５日（木）第116回ゴルフ会　箱根カントリー倶楽部

11月29日（水）第117回ゴルフ会　南総カントリークラブ

地域の会

千葉の会では、10月28日（土）に佐倉界隈（国立民族博物館見学も）を散策しますので、千葉県在住の方はもちろん他地域からの方も歓迎いたします。

新入会員の紹介 4月～７月の入会者（敬称略）

安部　健一
伊藤忠丸紅鉄鋼㈱

池　毅
住商ｸﾞﾛｰﾊﾞﾙﾘｻｰﾁ㈱

石原　和浩
伊藤忠丸紅鉄鋼㈱

一甲　直太郎
㈱メタルワン

遠藤　訓
新興工業㈱

小武　卓見
伊藤忠丸紅鉄鋼㈱

佐久間　匠
㈱メタルワン

佐野　吾郎
住友商事㈱

髙井　慶太
㈱メタルワン

高岡　盛一郎
住友商事㈱

髙橋　吉雄
㈱メタルワン

立花　俊浩
伊藤忠丸紅鉄鋼㈱

地頭所　孝浩
住友商事㈱

土田　高行
三井物産㈱

中村　明人
㈱メタルワン

野中　克典
三井物産ｽﾁｰﾙ㈱

馬場　新太郎
三井物産㈱

廣部　貴巳
豊田通商㈱

堀田　賢一
住友商事㈱

松田　耕二
㈱メタルワン

宮本　剛
㈱メタルワン

三好　宣弘
日本製鉄㈱

委員長の交代（敬称略）

	新（所属）	前（異動後所属）
財務委員長	船越　弘文（日本製鉄㈱）	右田　彰雄（日鉄ケミカル＆マテリアル㈱）
財務副委員長	北村　京介（㈱メタルワン）	今村　功（三菱商事㈱）

委員の交代・新任委員（敬称略）

財務委員会	中村　勝（元住友商事㈱）	山田　光彦委員との交代
第一事業委員会	南部　智一（元住友商事㈱）	山田　光彦委員との交代
第三事業委員会	丹内　孝治（元三井物産㈱）	相田　實委員との交代
第三事業委員会	平山　喜三（元山九㈱、元新日本製鉄㈱）	新任

訃報　渡辺和彦氏（5月18日）、馬渡 康憲氏（6月3日）が逝去されました。
謹んでお悔やみ申し上げます。

会合・行事・講演会等の日程について

令和5年7月14日 現在

＜　＞は会場。講演会、Monday Forumは、特に記載のない限り会場は鉄鋼会館

会合・行事・講演会等	日　程		時　間	講　師・場　所　等
夏季ゴルフ会	8月17日	（木）	Out Inとも 9:31	<龍ヶ崎カントリークラブ>
８月午餐会・講演会（第550回）	8月28日	（月）	午餐会12：00 講演会12：30	北村滋氏（前国家安全保障局長）
第47回第二事業委員会	9月6日	（水）	10：30	鉄鋼会館804号会議室
9月歌舞伎観劇会	9月7日	（木）	11:00	<歌舞伎座>
	9月9日	（土）	16:00	
第12回 Monday Forum	9月11日	（月）	18:00	守島基博氏（学習院大学教授）Ⅰ
９月午餐会・講演会（第551回）	9月12日	（火）	午餐会12：00 講演会12：30	一柳良雄氏（元通産省、経営コンサルタント）
第42回第一事業委員会	9月12日	（火）	14:00	<鉄鋼会館鍵室704号室> Onlineに変更の場合あり(9/13、13：30～)
第8回広報委員会	9月14日	（木）	14:00	オンライン
第33回第三事業委員会	9月15日	（金）	10:30	<鉄鋼会館会議室805号会議室>
（特別）音楽鑑賞会	9月16日	（土）	------	国際アマチュアピアノコンクール2023 <紀尾井ホール>
第141回麻雀大会	9月21日	（木）	12:00	<雀荘「利一」>
第51回音楽鑑賞会	9月22日	（金）	19:00	第136回定期演奏会<紀尾井ホール>
	9月23日	（土）	14:00	
第80回囲碁大会	9月25日	（月）	12:30	<アイアン・クラブ会議室>
第116回ゴルフ大会	10月5日	（木）	Out 10:00 In 10:06	<箱根カントリークラブ>
10月午餐会・講演会（第552回）	10月6日	（金）	午餐会12：00 講演会12：30	藤崎一郎氏（中曽根平和研究所顧問、元駐米特命全権大使）
第52回 秋の旅行	10月23日～10月26日	（月）（木）	------	秋の東北（岩手県－盛岡、三陸、平泉など）
<地域の会> 千葉の会	10月28日	（土）	------	佐倉界隈散策
第13回 Monday Forum	10月30日	（月）	18:00	守島基博氏（学習院大学教授）Ⅱ

会合・行事・講演会等の日程について

11月午餐会・講演会（第553回）	11月14日	（火）	午餐会12：00 講演会12：30	河野克俊氏（第５代統合幕僚長）
自然散策会	11月16日	（木）	------	浜離宮恩賜庭園界隈
第52回音楽鑑賞会	11月17日	（金）	19:00	第137回定期演奏会<紀尾井ホール>
	11月18日	（土）	14:00	
第14回 Monday Forum	11月20日	（月）	18:00	梅本宏彦氏（BRAIN RESOURCE㈱代表取締役 元三菱商事、セイコーウオッチ元副社長COO）
第117回ゴルフ大会	11月29日	（水）	東 9:30	<南総カントリークラブ>
11月歌舞伎観劇会	11月吉日			＜歌舞伎座＞
第142回麻雀大会	12月14日	（木）	12:00	<雀荘「利一」>
12月講演会（第554回）	12月20日	（水）	講演会15：30	寺島実郎氏（日本総合研究所会長）
令和５年忘年会	12月20日	（水）	17：30	鉄鋼会館701号会議室
1月午餐会・講演会（第555回）	1月16日	（火）	午餐会12：00 講演会12：30	橋本五郎氏（読売新聞特別編集委員）
第118回ゴルフ大会	1月・2月吉日			<鷹之台カントリークラブ>
第15回 Monday Forum	1月22日	（月）	18:00	三村明夫氏（アイアン・クラブ理事長）
2月午餐会・講演会（第556回）	2月9日	（金）	午餐会12：00 講演会12：30	阿古 智子氏（東京大学名誉教授）
第16回 Monday Forum	2月19日	（月）	18:00	堀埜一成氏（㈱サイゼリア元社長）
3月午餐会・講演会（第557回）	3月吉日		午餐会12：00 講演会12：30	原島 博氏（東京大学名誉教授）
3月歌舞伎観劇会	3月吉日			＜歌舞伎座＞

令和５年7月　発行　アイアン・クラブ　事務局
〒103-0025　東京都中央区日本橋茅場町３－２－１０
（鉄鋼会館内）
☎03-3669-4825
e-Mail ironclub@ironclub.jp
URL　https://www.ironclub.jp